弾圧粉砕に結集せよ！

日大全共闘会議　[illegible]

闘う全ての学生諸君。

昨年、日米政府、声明を発して安保条約、[illegible]を前にして、共同防衛体制の強化を図り沖縄問題を軸として[illegible]の役割を明確にし、その目的をもって、アジア侵略を画策しようとした。しかし我々が[illegible]ることを通じて、その欺瞞性は白日のもとにさらされた。一昨年の十・二十一[illegible]日本人が総決起した時に、政府・ブルジョアジーは、一切の[illegible]しようとした。一昨年[illegible]において、社会党の[illegible]と、日共の[illegible]は、[illegible]によって、日本人民に議会民主主義の幻想を抱かせたことによるものに他ならない。[illegible]革命的左翼による斗いに対して、ブルジョアジー[illegible]に対応出来ない政府は、[illegible]という政治幻想の上にたった国家権力＝機動隊が[illegible]することは、まさに自ら幻想性を人民大衆の前にあばき出し、[illegible]としてその性格をあらわしたことである。[illegible]裁判で示されているように、司法権力の行政権力への屈服は、司法の中立性の欺瞞をあばき出し、あまつさえ妊娠七ヶ月の女性を保釈しないということは、司法と行政が完全に一体化した戦前の弾圧体制の復活に他ならない。しかし政府・ブルジョアジーの弾圧は決して、彼らの強さを示しているのではなく、彼らの危機の[illegible]表現でしかすぎない。現下の弾圧は、大学立法・大量起訴・長期勾留・実刑判決に示されているように、実質[illegible]攻撃である。すなわち革命的左翼を組織的に壊滅することである。

全日大生諸君！

六八・六九年日大斗争が、十八年[illegible]によって抑圧されつつ、[illegible]日大内の問題からの斗いから、帝国主義打倒への斗いの段階は、学生を商品化しなければ私立大学の経営はなりたたないという資本の論理の破綻の結果であった。しかし、あれほど、全国へ野火のごとく広がった全共斗運動が、大学治安立法発効後、一切のバリケードが大学内から取られ、逆バリ（学校の周りを鉄板、鉄条網でかため、入構証がないと入れない）という現状の中で、全共斗そのものがもっていた主体的弱さが暴露された。例えば、[illegible]などと言って全共斗運動を途中で放棄した学友諸君は、大学内に直接的に国家権力の暴力装置＝機動隊が対峙するという中で、全共斗活動家から全共斗シンパへと転落していった。六八・六九年の全共斗運動の幻想によってはならない。諸君！　国家権力は学内に機動隊を直接導入することによって、一定程度全共斗運動を止揚してきている（政府当局には全共斗の事実的衰退）のだ。こういう中にあって自らをどのように位置づけるのか。すなわち力対力の激突の七十年代に向って、その路線上に全共斗運動を出発しなければならないし、自己を階級的視点を持った人間として形成しなければならないであろう。

スケジュール

六・三〇　日大[illegible]斗争第二回公判

日時　二月二十六日　午前十時　東京地裁

第三回公判

三月十六日　午後一時

六・四　[illegible]

日時　二月二十五日　午後一時　東京地裁